

研究余話Ⅱ 近世富山城下町出土の動物遺存体

—2006 年度、2008 年度調査出土資料の紹介—

納 屋 内 高 史（埋蔵文化財センター嘱託学芸員）

はじめに

ここで紹介する資料は、2006 年度及び 2008 年度に調査された、近世富山城下町跡から出土した動物遺存体である。資料が出土した調査地点は、両年度ともに、武家屋敷地と町人地の境界付近に当たる。北側の武家屋敷と南側の町人地を隔てる背割下水が検出されているほか、多数の土坑や溝が検出されている。

出土した資料は、その多くが背割下水と塵穴と思われる土坑から出土しており、時期は概ね近世から近代初期と考えられる。資料は、全て目視により取り上げられたものである。また、2008 年度調査出土資料の一部はパリノ・サーヴェイによって分析され、その結果、イワガキ、ニワトリ、イヌの出土が報告されている（パリノ・サーヴェイ 2010）。

今回、未報告資料の分析を行った結果、総点数 34 点の動物遺存体が見つかり、このうち、29 点を同定することができた。これまでに報告された種類の他に、新たにハマグリ、クロダイ属、カモ科、ニホンジカ、イルカ類の出土が確認された。

以下、今回新たに見つかった資料の詳細を述べる。



図：調査地点の位置 (1/12500)

1 分類群ごとの記載

貝類

カキ類： イワガキ (*Crassostrea nippona*) の右殻が 2 点同定された。2 点とも 2008 年度調査区 SK82 から出土している。また、属以下の分類群の不明なカキ類の殻が、2008 年度調査区 SD001（背割下水）と SK103 から 2 点出土している。マガキと比較して著しく櫓皮状を呈する殻の状態から、おそらくイワガキのものと思われるが、殻頂部を欠損するため、詳細な同定は避けた。

ハマグリ (*Meretrix lusoria*): 左殻が 1 点同定された。2008 年度調査区 SD001（背割下水）から出土している。復縁部が欠損しているが、殻長 60～70mm 前後の個体のものと思われる。

魚類

クロダイ属 (*Acanthopagrus* sp.): 主鰓蓋骨 (右) が 1 点同定された。2006 年度調査区 SK24 から出土している。

鳥類

カモ科 (*Anatidae* gen. et sp. indet.): 上腕骨 (左) が 1 点同定された。2008 年度調査区 SK36 から出土している。比較的小型のカモ科のものであり、江田 (2005) の基準に照らし合わせるとマガモ属に近い特徴を持つ。

哺乳類

イヌ (*Canis lupus familiaris*): 大腿骨 (右) が 2 点同定された。2006 年度調査区包含層から 1 点、2008 年度調査区 SD08 堀方から 1 点出土している。2 点とも両骨端が癒合しており、成犬のものである。

資料の計測値から、西中川等の体高推定式に基づき、体高を推定したところ、2点とも体高52～53cm程度の個体のものと推定された。これは現在の犬種と比較すると紀州犬や四国犬と同程度の大きさである。

ニホンジカ(*Cervus nippon*)： 角及び左の踵骨、距骨、足根骨が1点ずつ同定された。角は背割下水上層から、距骨、踵骨、足根骨は2006年度調査区SK10から出土している。出土した角については、角の第2分岐または第3分岐から上の先端部である。角の長軸に直行する方向から人為的に切断されており、また、切断面から角の長軸に平行する切れ込みが入っている。切断面、切れ込みとも、傷の側面に、平行する線条痕が見られること、切断面の切り残し部分、及び切れ込みの底部が平滑であることから、資料の切断、及び切れ込みの形成は鋸によって行われたと考えられる。また、出土した距骨、踵骨、足根骨は、全て左側のものであること、同一遺構から出土していること、各資料の関節どうしがよくフィットすることから、同一個体由来のものと考えられる。

表：出土動物遺存体同定表

調査年度	地区	遺構等	種別	種名	部位	部分	位置	左右	破片	計測値	備考
2006年度	A-1	SK24	硬骨魚類	クロダイ属	主鰓蓋骨			R	1	関節部幅7.90	
2006年度	A-1	包含層 G3	哺乳類	イヌ	大腿骨		完形	L	1	GL:180.00,Bp:34.75,Bd:30.50	両骨端癒合 骨体背面近位に長軸直行する線痕有り カットマークか?
2006年度	C-2	SD08 西側堀片	哺乳類	イヌ	大腿骨		完形	L	1	GL:183.00,Bp:40.50,Bd:35.30	両骨端癒合
2006年度	A-2	石組上層	哺乳類	ニホンジカ	角				1		角上部を切断。切断面箱状。切断面側面に線状痕有り。ノコギリにより切断と考えられる。骨角器廃材か
2006年度	C-2	SK10	哺乳類	ニホンジカ	踵骨		完形	L	1	GL:100.35,GB:31	
2006年度	C-2	SK10	哺乳類	ニホンジカ	距骨		完形	L	1	GLI:48.30,GLm:42.50,Bd:28.15	上記踵骨と同一個体
2006年度	C-2	SK10	哺乳類	ニホンジカ	足根骨	立方舟状骨	完形	L	1		上記踵骨と同一個体
2006年度	A-2	トレンチ内	哺乳類	クジラ目	椎骨	胸椎	椎弓		1		イルカ類 前面、両側面、椎弓根を鋭利な刃物により切断(おそらく打撃)
2006年度	A-2	トレンチ内	哺乳類	クジラ目	椎骨	胸椎	椎弓		1		イルカ類 前面、両側面、椎弓根を鋭利な刃物により切断(おそらく打撃)
2006年度	A-2	トレンチ内	哺乳類	クジラ目	椎骨	胸椎	椎弓		1		イルカ類 前面、両側面、椎弓根を鋭利な刃物により切断(おそらく打撃)
2006年度	A-2	トレンチ内	哺乳類	クジラ目	椎骨	胸椎	肋骨突起		1		イルカ類 椎弓本体との境界で切断
2006年度	A-2	トレンチ内	哺乳類	クジラ目	椎骨	胸椎or腰椎			1		イルカ類 椎弓根、棘突起上部を鋭利な刃物により切断(おそらく打撃)
2006年度	A-2	トレンチ内	哺乳類	クジラ目	肋骨		近位部～骨幹部	R	1		イルカ類 近位端端部で切断。鋭利な刃物による
2006年度	A-2	トレンチ内	哺乳類	クジラ目	肋骨		近位部～骨幹部	R	1		イルカ類 近位端端部で切断。鋭利な刃物による
2006年度	A-2	トレンチ内	哺乳類	クジラ目	肋骨		近位部～骨幹部	R	1		イルカ類 近位端端部で切断。鋭利な刃物による。内側面に長軸直行方向のカットマーク有
2006年度	A-2	トレンチ内	哺乳類	クジラ目	肋骨		近位部～骨幹部	R	1		イルカ類 近位端端部で切断。鋭利な刃物による。内側面に長軸直行方向のカットマーク有 骨幹部で切断?
2006年度	A-2	トレンチ内	哺乳類	クジラ目	肋骨		近位部～骨幹部	R	1		イルカ類
2006年度	A-2	トレンチ内	哺乳類	クジラ目	肋骨		近位部	L	1		イルカ類 近位端端部切断
2006年度	A-2	トレンチ内	哺乳類	クジラ目	肋骨		近位部	L	1		イルカ類 近位端端部切断
2006年度	A-2	トレンチ内	哺乳類	クジラ目	肋骨		近位部	L	1		イルカ類 近位端端部&骨幹部切断
2006年度	A-2	トレンチ内	哺乳類	クジラ目	椎骨	腰椎?	肋骨突起		1		イルカ類 椎骨との境界部で切断
2006年度	A-2	トレンチ内	哺乳類	クジラ目	椎骨	腰椎?	肋骨突起		1		イルカ類 椎骨との境界部&端部(長軸平行)切断
2006年度	A-2	トレンチ内	哺乳類	クジラ目	椎骨	腰椎?	肋骨突起		1		イルカ類 椎骨との境界部&端部(長軸平行)切断。椎骨河切断面に穿孔?(大の咬痕の可能性有り)。骨体中央部に刻み状のきざり有り。
2008年度	F2	SD001B 西側砂礫層	貝類	カキ類	殻			R	1		
2008年度	F2	SK103	貝類	カキ類	殻				1		
2008年度	G2	SK082	貝類	イワガキ	殻			R	1	殻長:52.85,殻	
2008年度	G2	SK082	貝類	イワガキ	殻			R	1	殻長:36.80,殻	
2008年度	F2	SD001下層	貝類	ハマグリ	殻			L	1	殻長:(58.80),殻	
2008年度	F2	SK036	鳥類	カモ科	上腕骨		近位部	L	1		マガモ属に類似

クジラ目の一種(イルカ類)(Cetacea fam.,gen. et sp.indet.): 椎骨及び肋骨が計 16 点同定された。全て 2006 年度調査区にもうけられたトレンチ内からの出土であり、重複する部位が見られないことから、同一個体に由来する可能性が高い。資料の大きさから、おそらくマイルカやカマイルカなどの小型のイルカ類のものと考えられる。椎骨は 8 点が出土しており、その内訳は胸椎 4 点、腰椎? 3 点、胸椎または腰椎 1 点である。全て椎弓または肋骨突起のみの状態で出土しており、椎体部分の出土は見られない。また、全ての資料に切断痕が見られ、椎弓については、ほとんどの資料で肋骨突起及び椎体との接続部分が鋭利な刃物により切断されているほか、前面が切断されているものも見られる。肋骨は 8 点出土しており、その内訳は右側 5 点、左側 3 点である。ほとんどの資料が、近位端端部を鋭利な刃物により切断されている。

2 考察

今回、新たに同定された動物遺存体は、総点数 29 点にのぼる。これらの資料は、そのほとんどが、食糧資源や、製品の素材として利用されたと考えて差し支えなく、その多くが、塵穴と考えられる土坑や背割下水の中から出土していることから、食糧資源や製品の素材として利用された後、廃棄されたものと考えられる。

同定された動物遺存体を出土地点ごとに見てゆくと、2006 年度調査地点出土資料については、背割下水上層、SK10 からニホンジカとイヌ、SK24 からクロダイ属、トレンチ内からイルカ類、包含層からイヌが出土している。この中でも特に注目されるのは、背割下水上層出土のニホンジカの角とトレンチ内から出土したイルカ類である。

背割下水上層出土のニホンジカの角については、鋸による加工痕が見られた。加工痕の位置や形状に特定の形を作出しようとする意図は読み取れず、おそらく角から製品用の部材を切り取った後の廃材と考えられる。本地点の背割下水からは、これまでに鉄滓の集中層が検出されており、付近で小規模な鍛冶が行われていたことが想定されている。今回新たに見つかった廃材と考えられる角の存在は、本地点付近で鍛冶だけでなく、骨角製品の製作も行われていたことを示唆する。

トレンチ内から出土したイルカ類については、出土したほぼ全ての資料に人為的な切断痕が見られた。出土した部位が、道具の部材としてあまり有用でない椎骨、肋骨のみであり、また、出土した全ての資料が、一個体に由来する可能性が高く、生体時に互いに関節する部分が切断された状態で出土していることから、本地点付近で何らかの切り分け行為を行った際についたものと考えられる。

イルカ類の切断痕を更に詳しく観察すると、出土した資料は、椎骨と椎骨の間で分離されていること、左右側の胸椎肋骨突起から肋骨近位端にかけて切断することにより、3 枚おろしに近い形で肋骨を外されていること、椎弓部分を水平に切断していることが読み取れる。また、本遺跡から出土した椎骨は椎弓部分のみであり、通常遺跡からよく出土する椎体部分は見られない。このことは、椎体部分が分離され、何らかの用途に用いられた後、別の場所に廃棄されたことを示す。

これらのことから、本遺跡出土のイルカ類は肉から骨に至るまで、徹底的な利用が行われていたと考えられる。イルカ類を食料としてのみ利用していたのならば、ここまで徹底的な利用を行う必要性は考えがたく、食肉としての利用だけでなく、油の採取など食用以外の利用も行われていたことを考慮に入れる必要がある。

以上に述べたことから、本調査地点付近では骨角製品製作やイルカ類の食用以外での利用など、鍛冶意外にも様々な生産活動が行われていたことが考えられる。

次に 2008 年度調査地点では、SK036 からカモ科、SD001 からハマグリとカキ類、SK82 からイワガキ、SK103 からカキ類が出土している。2008 年度調査地点出土資料については、一部がパリノ・サーヴェイにより報告されている。それによれば、SD001 からニワトリとイヌ、SK011、SK82 からイワガキの出土が報告されている。今回の分析結果と比較すると、今回の分析では新たに SD001 からハマグリ、SK036 からカモ科の出土が確認され、本調査地点における動物利用の実体がより明らかになったと言えるだ

ろう。また、本地点から出土したイワガキについては、今回、及びパリノ・サーヴェイ分析資料ともに右殻に偏る傾向が見られる。イワガキを含むカキ類の殻は、左殻がくぼみ、右殻が扁平になるという特徴があるが、左右の殻の強度にそれほど大きな差はなく、土中に埋没した場合に右殻が残りやすいという傾向はない。むしろ左殻のほうがくぼんで大型化する分、発見されやすい。そのため、本地点のイワガキの出土傾向は、左殻と右殻を別々の場所に廃棄していたことを示し、当時の利用、廃棄のあり方を反映していると言える。カキ類は左殻がくぼむという形態上の特徴から、賞味する際に左殻を器代わりに用いることがあるが、本遺跡の出土傾向はそういった利用のあり方が反映されていることも考えられるだろう。

おわりに

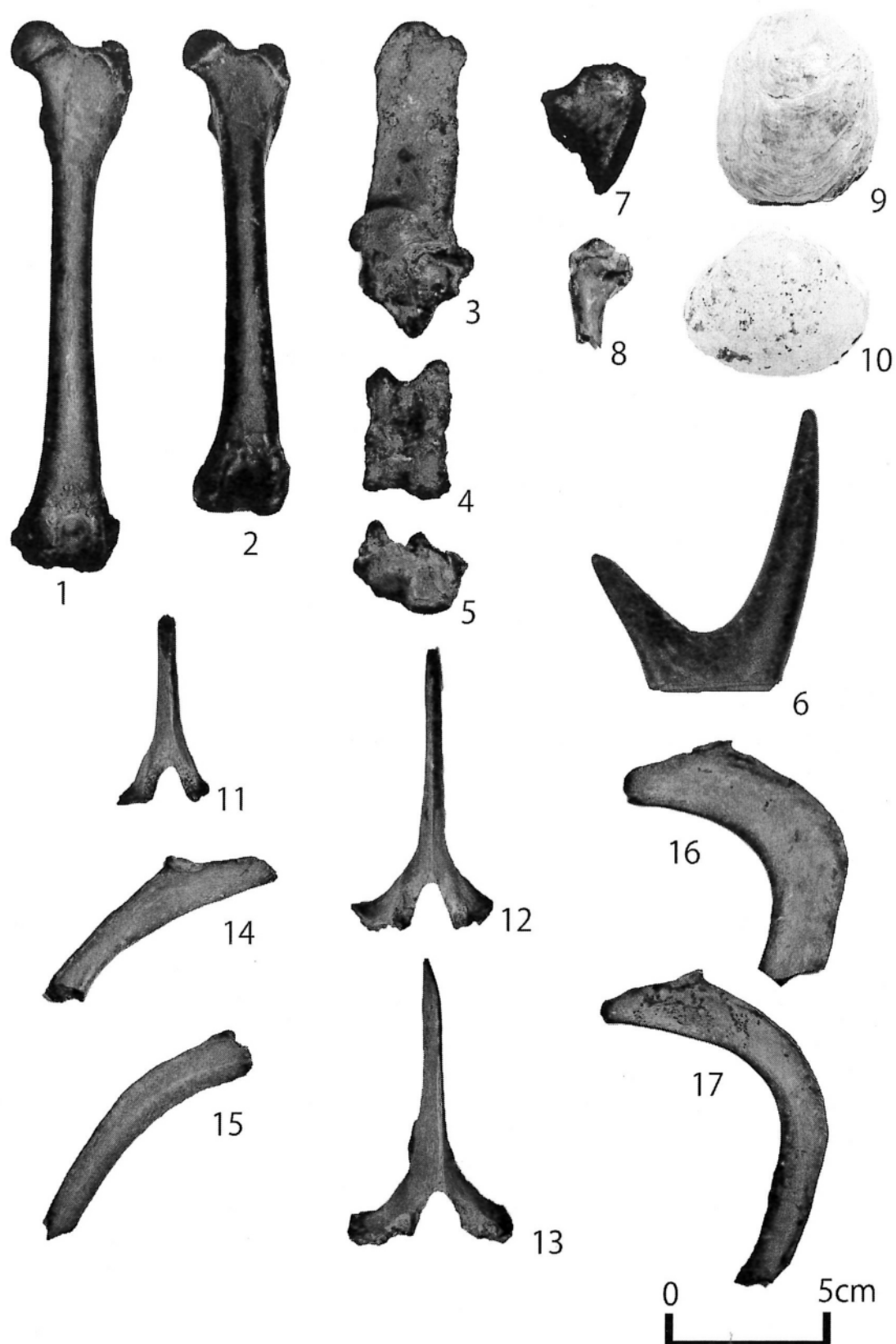
以上、近世富山城下町跡出土動物遺存体について、未報告資料の紹介を行うとともに、若干の考察を行った。今回の分析により、2006年度調査地点については、鍛冶以外にも様々な生産活動が行われていたことが考えられた。また、2008年度調査地点については、新たに2種類を同定することができ、本地点における動物利用の実態をより明らかにすることができた。今後は、文献資料や絵図との対比、及び他遺跡との比較を行い、出土した資料の持つ意味や出土した地点の位置づけを考えてゆくことが必要である。

注

同定表中の計測値は、Driesch(1976)に基づき、計測を行った値である。

引用・参考文献

- 江田真毅 2005 「生活復原資料としての鳥類遺体の研究ーカモ亜科遺体の同定とその考古学的意義『海と考古学』六一書房
- 西中川駿他 2008 「イヌの骨計測値から骨長並びに体高の推定法」『動物考古学』25, 動物考古学研究会
- 富山市教育委員会 2006 『富山城跡発掘調査報告書ー総曲輪通り南地区第一種市街地再開発事業に伴う富山城城下町の発掘調査報告』
- 富山市教育委員会 2010 『富山城跡発掘調査報告書ー総曲輪四丁目・旅籠町地区優良建築物等整備事業に伴う富山城下町の発掘調査報告』
- パリノ・サーヴェイ 2010 「第IV章 理化学分析」『富山城跡発掘調査報告書ー総曲輪四丁目・旅籠町地区優良建築物等整備事業に伴う富山城下町の発掘調査報告』富山市埋蔵文化財調査報告 39, 富山市教育委員会埋蔵文化財センター
- Driesch, Angela Von Den 1976 *A guide to the measurement of animal bones from archaeological sites. Peabody Museum Bulletins 1*, Peabody Museum Press, Cambridge



写真：出土動物遺存体

1・2：イヌ大腿骨（左），3：ニホンジカ踵骨（左），4：ニホンジカ距骨（左），5：ニホンジカ足根骨（左），6：ニホンジカ角，7：クロダイ属主鰓蓋骨（右），8：カモ科上腕骨（左），9：イワガキ右殻，10：ハマグリ左殻，11～13 クジラ目椎骨（胸椎），14・15：クジラ目肋骨（左），16・17：クジラ目肋骨（右）